

神の宮居と仰ぎ見る。

有限有象の人の身も

靈想たまひの天を翔る時

常住の家をここに見て

エホバの業の我が身をば

靈の宮居とかへり見る

漸く調べの音も高からんとするに是れなん華胥の國の旅路、南阿の夢なりき

新 体 詩

春 園

白月

春の日ゆるう光りなげ

こゝめ櫻の盛りなる

緑の芝の細路は

薔薇の雪に埋れけり

黄や紅、白や薄紅や

濃きも淡きも八重一重

咲きてまた散り散りて咲く

春の園生は花に満つ

花に曇りの寂寥を

やぶるはよ風音ひくく

花より花を吹き渡る

風に綾ある白晝かな

讀書の疲れ立ちも出で

萌ゆる若草靡けつ

庭の飛石縫ひ給ふ

麗し姫の逍遙や

薔薇の香りときめきて

文ある衣袖長う

丈なす髪は背に垂れて

紅の髪飾は小ゆるぎぬ

戀知り初めて昨日今日

若かる戀を白日の

言葉になすにはゝかるか

うたをぐるなる口ずさみに

天空に出づる星のごと

姫の瞳は輝けり

かよふ焔は瞳より

瞳を射貫く戀の征矢

戀の甘酒愛のかめ

雫は永久に絶わせねば

ほのかに酔へる人の子の

若かる胸はゆるぐらむ

門 出

内田夕闇

この一篇は、ある友に向つて、我が故郷に對する感想の變化を告白するものなり。字句無難と、諧調の亂脈さは敢て問はざれ。

春の命の花のかげ